BOOK GUIDE
今月のブックガイド

わたしの体に呪いをかけるな

リンディ・ウェスト著、金井真弓訳
双葉社
定価 2530 円（税込）

「わきまえろ」の呪いを蹴っ飛ばせ！

原題は“Shrill（シリル）”――時は 2016 年、米国ではヒラリー・クリントンを破り、トランプ大統領が当選した選挙の最中に執筆された。「甲高い声」を意味するシリルは、「身の程知らず」で「生意気」な女性（ヒラリー）への反感や拒絶、罰を表すものとして使われた言葉だ。性差に基づく侮辱は、しかし、大統領への大志を抱く女性に向かうだけではない。世の中は、女性への侮蔑と攻撃に満ちている。本書は、幼少期から「太った体」への偏見にさらされてきた 1982 年生まれのリンディが、体型だけでなく、あらゆる多様性を否定しようとする社会に No を言う自伝的エッセイである。

「巨大」なサイズで生まれた彼女は、「自分を小さく見せる」ようになる。おこがましくならないように、人生そのものを小さくしながら。でも、そんなふうに心を殺さなくてもよいのだとリンディは語る。たくさんの失敗や傷つきに落ち込みながらも、そんな自分にあきれて、もう笑うしかないような体験を重ねながら、人生は進んでいく。コメディアンでもある彼女が披露してくれるエピソードは、どれもユーモアに満ちていて、読んでいると私自身の痛みにも苦笑いできるくらいになれるほどパワフルだ。

しかし、ジャーナリストとして活躍し始めたリンディは、体型をネタにした誹謗中傷にさらされる。インターネットトロール（怪物）と呼ばれる嫌がらせや暴力をする人々からの執拗な攻撃。そこには、「お前をレイプしてやる」「レイプされる心配なんかない」というファットフォビア（肥満への恐怖・嫌悪）とミソジニー（女性嫌悪・蔑視）が混在した性暴力があり、何重にも重なる差別がある。

こうしたレイプ・ジョークは、日本の社会でもいくらもある。「分別のある人ならジョークだと感じとれる」「ユーモアを解さない女性が言い立てていること」という言説は、性暴力の現実を虚構のネタにして、被害者を笑うものだ。トロールは、インターネット社会が生んだものではなく、彼らに活躍の場を与えたにすぎない。女性の人生を小さくする社会の根底にあるミソジニーの問題がはっきり見えてくる。

あまりにも大きな社会の課題がある。けれど、リンディは FBI に相談し、会社に掛け合い、ついには書き込みをした男性と対面する。「トロールが普通の人だとわかったことは恐ろしかった」と、彼女は書き込みよりも恐ろしい現実を見る。“匿名の見知らぬ人たちに充足感を与えるつもりはないが、彼らの人間性を見失うことはするまい”と考えた彼女は、No と言い続けることで世界を築く決意をする。

本書のテーマは、ルッキズム（外見至上主義）だけではない。「ヴァギナが月に一度、チョコレート・ファウンテンと化して（失礼）、パンツを殺人現場さながらにしてしまう」なんていうリアルな月経の話、親知らずを抜くのと同じように「通常の医学的処置だった」という中絶体験。女性の性についての赤裸々なトークは、「私も」「私は」という新たな声を引き出すはずだ。みんな違うはずのからだや性に対する考えについて、私たちは語ることもなければ、聴くこともない。

日本語版の真っ赤な表紙とイラストは、インパクト十分。日常生活やメディアに溢れる「呪い」に対して No を表明するエネルギーに溢れている。拡声器を握って叫ぶリンディの写真が使われている原著の表紙の方が、彼女の勇ましくも明るいパワーが伝わって私の好みなのだが、「太った女の写真」は日本の書店に並べにくいのだろうか。

「勇敢になれ、そして甲高い声をあげよう」という彼女のメッセージは、私たちが変わり、社会を変えるものになるはず。社会が作った境界を蹴っ飛ばせ！

（大阪大学大学院准教授　野坂祐子）